



わたくしの研究のことなど—— 自己紹介を兼ねて

鳥越 輝昭 (非文字資料研究センター 研究員)

はじめまして。非文字資料研究センターにお迎えくださったことを心より感謝いたします。研究生活をしたいために大学教員の仕事を選んだ者として、純粋な研究機関に仕事を与えられたことは無上の喜びです。この新しい場で、浅学非才の身にできるかぎりの貢献をしたいと考えています。このニュースレターに執筆するのは初めてですから、自己紹介を兼ねて、わたくしの関心のありかた、研究の概要、そして、これからどのような貢献ができそうであるか、について書いておきたいと思います。

わたくしは生来寡黙なので、どういう研究をしているのかと問われたときには、簡単に「比較文学と比較文化史のようなものを少し研究しています」と答えることにしています。さらに問われると、「イタリアの都市ヴェネツィアをめぐる表象の歴史を中心に研究しています」と答えます。そして、「たとえば、トーマス・マンの小説『ヴェニスに死す』やヴィスコンティの映画『ベニスに死す』のなかで、ヴェネツィアがどのようなイメージで描き出されたり、どのような役割を果たしているかを調べています」と答えます。たいしてはこれくらいの説明で満足してくださることが多いので、別の話題に移ってゆきます。しかし、このニュースレターを今お読みの

方は、ひょっとするともう少し関心を持たれるかもしれませんが、少し詳しく書いてみます。

図版をご覧ください。図1は、ヴェネツィア人画家カナレットが描いた『ヴェネツィアのスカヴァオーニ河岸の光景』(1730年代晩期)という絵で、図2は、英国人画家ターナーが描いた『ヴェネツィアのためいきの橋』(1840)という絵です。ふたつの絵は、どちらも、都市ヴェネツィアのいわば正面玄関あたりを、似た角度から描いていますが、大きな違いがあります。ターナーの絵では中央に描かれ画題にもされている「ためいきの橋」が、カナレットの絵では無視されているのです。カナレットは、英国人グランドツーリストたちに、ヴェネツィアの名所を描いた絵を売って大成功した画家でしたから、仮に「ためいきの橋」が名所であったのなら、かならず描き込んだに違いありません。この橋は、1600年代の初めに、新設された監獄(ターナーの絵のなかで橋の右側に描かれている建物)と統領宮殿(橋の左側に描かれている建物)とを運河越しに繋ぐために架けられたものでしたが、じつは、長い間名所ではなく、「ためいきの橋」という呼び名もありませんでした。この橋が目され、「ためいきの橋」と呼び習わされるようになるのは、橋



図1* カナレット『ヴェネツィアのスカヴァオーニ河岸の光景』(1730年代晩期)



図2** ターナー『ヴェネツィアのためいきの橋』(1840)



が出来てから 200 年ものちの、1790 年前後のことです。

「ためいきの橋」という名は、統領宮殿（独立国家だったころのヴェネツィアの元首公邸・議事堂・裁判所を兼ねた建物）のなかの裁判所で死刑の判決をうけた罪人が、監獄に連れて行かれるときに、二度と生きてこの橋を渡ることはないという思いから「ためいき」をついただろう、という想像から生まれた呼称です。この橋が注目されるようになった原因は三つあります。ひとつの原因は、この橋が、かつてのヴェネツィアでおこなわれていた貴族寡頭政治を象徴するものとなったからです。新監獄は、それまでの監獄では数が足りなくなったために新設されたものなので、政治体制が警察国家的なものに変質した現れであったのですが、そのことには 200 年近く関心はもたれませんでした。関心は、アンシャンレジムへの憎悪から生まれたのです。この橋が注目されるようになった第二の原因は、運河脇の暗い地下牢に魅せられるような病的な想像力です。つまり、「ためいきの橋」の吸引力は、大きく見れば、ヨーロッパのなかの啓蒙思想からフランス革命へと進んだ精神風土、そしてまたロマン主義の精神風土のなかで生まれています。

さらに、「ためいきの橋」の吸引力には、第三の直接的原因、英国の詩人バイロンが関係しています。バイロンは、フランス革命後の精神的動揺と自由主義的ロマン主義とを一身に体現した、汎ヨーロッパ的スターでした。この有名人が、注目の連作詩（『チャイルド・ハロルドの巡礼、第 4 部』1817）の冒頭で、「わたしは、ヴェネツィアの『ためいきの橋』の上に立った。宮殿があり、両端は監獄だった」と書いたので、この橋はヨーロッパ全体で注目されるようになりました。ターナーの描いた『ためいきの橋』も、バイロンのこの詩行に基づいており、出展の際にはそれを引用していたのです。

以上はわたくしの研究内容のごく小さな例ですが、わたくしの研究の特徴はたぶん三つあります。第一に、地域的に、国民国家・国民文化の枠組みによらず、ヨーロッパという枠組みで考え、時代的に、中世から 20 世紀までのパースペクティブで考えようとしている点です。第二に、研究対象を、文学作品、旅行記、絵画、建築物、オペラ・演劇・映画の DVD 資料と台本など、文字・非文字を問わず雑多な資料に求めていることです。第三に、究極の関心が精神的で、なおかつ、日本のなかでは例外的な視角を持っていることです。

20 年前に F・パウマー『近現代ヨーロッパの思想——その全体像』というかなり厚い（800 頁ほどの）訳

書を出版したことがあります。これは、17 世紀から 20 世紀半ばまでのヨーロッパ思想の潮流をたどった良書で、翻訳しながらいぶん勉強になったのですが、じつは、その翻訳作業と前後して発見した本に、オーストリアの精神史家フリードリッヒ・ヘーアの『ヨーロッパ精神史』という大著があります。著者自身が原著の内容を数分の一に縮約した版が邦訳されていますが、原著自体の邦訳は残念ながらありません。ドイツ語は、わたくしには英・仏・伊語につぐ第四外国語でしかありませんので、この精神史を翻訳するようなことはないだろうと思います。しかし、この書は、長らく、わたくしには最も共鳴するところの多い、汲めども尽きぬ泉のような存在です。

ヘーアは、紀元 2 世紀から 20 世紀までのヨーロッパについて、思想家たちはむろんのこと、さまざまな社会事象・文化事象の根底にある精神形態を、博識と洞察力とを駆使しながらあぶり出し、精神形態の持続と影響関係とを描き出してゆきます。ヘーアは青年期に反ナチ闘争をした体験があり、それが思考と研究の原点にある様子なのですが、たとえばヒトラーを、ヘーアは、オーストリアの山奥で迫害から生き延びた再洗礼派・熱心派キリスト教の精神を受け継ぎ、下層から憎悪の眼で捉えたバロック的神聖ローマ帝国を再興しようとした人物として描き出します。ヘーアの『ヨーロッパ精神史』はヨーロッパ精神の根底を露わにする好著なのですが、日本ではほとんど読まれてこなかったようです。その原因は、ヘーアの立場がローマ・カトリックのなかの、とりわけ理性と人文学的教養と批判とを大切にきたリベラル派であるため、知識人の多くが没キリスト教、もしくは反キリスト教、もしくは反ローマ・カトリックである日本では受け入れられにくかったからでしょう。そのような書を好むわたくしは日本では少数派に属します。そして、わたくしもまた、ヘーアと同じく、たとえばヴェネツィアをめぐる表象の背後にある精神形態とその動きとを捉えようとしています。ですから、わたくしの研究内容をほんとうに正確に記述するなら、「ヴェネツィアなどをめぐる表象の背後にある精神形態の歴史的研究」とでもなるのでしょう。

ともあれ、こういう関心と研究経験とを背景にして、わたくしは、非文字資料研究センターの今後の研究に、浅学なりに、貢献できることがあるだろうと思っています。それは、第一に、非文字資料をふくむ多様な資料の分析経験、特に文字資料との関連づけ。第二に、ヨーロ

ッパ文化史全体への目配り。そして第三に、日本では珍しいローマ・カトリック的な視野、というところでしょうか。たとえば、キリスト教的主題を伏在させる絵画を資料にすることになっても、あまり見当外れな分析はしないだろうということです。

*Giovanni Antonio Canal, called Canaletto (Italian

(Venice), 1697-1768), *View of the Riva degli Schiavoni, Venice*, late 1730s, oil on canvas, 18 1/2 × 24 7/8 in. (47.1 × 63.3cm.). Toledo Museum of Art (Toledo, Ohio), Purchased with funds from the Libbey Endowment, Gift of Edward Drummond Libbey, 1951.404 Photo Credit: Image Source, Toledo.

**Joseph Mallord William Turner, 1775-1851, *Venice, the Bridge of Sighs*, exhibited 1840, oil on canvas, 686 × 914 mm. Accepted by the nation as part of the Turner Bequest 1856. Digital Image Credit: Tate, London.



鹿児島県に残る「琉球」 —僧侶の墓を中心に—

渡辺 美季 (非文字資料研究センター 研究員)

1. 加世田の琉球漆器

2005年11月25日、私は何名かの研究者と鹿児島県南さつま市にある加世田郷土資料館を見学していた。加世田とゆかりの深い戦国大名・島津忠良（日新公、1497～1568年）の遺品を展示するコーナーにさしかかった時、横にいた琉球史研究者の上里隆史氏が「日新公の御鉢子」とされる漆器を指して「これ古琉球の漆器じゃないですか?」と言った。古琉球とは、琉球王国の前半期——王国が形成され始める12世紀頃から、1609年の島津氏の琉球侵攻によって琉球が日本の支配下に入るまで——の時期を指す。後半期である近世琉球——1609年から1879年の琉球処分によって王国が終焉を迎えるまで——の漆器であるならまだしも、それ以前のもの、しかも琉球の漆器と気づかれずに残っているなんて、そんなことがあるのだろうかと思半信半疑だったが、果たして後日専門家による本格的な調査が行われ、古琉球後期の琉球漆器の入子碗であることが確認された(安里進「仙台と薩摩に伝世した琉球漆器の祭具」『漆工史』29、2006)。私は鹿児島に残る琉球の貴重な遺物の「発見」現場に立ち会ってしまったことになる。

鹿児島（薩摩）は古来より地理・経済・政治的に琉球

王国と関わりが深い地域であり、今も様々な琉球の「痕跡」が残っている。その中にはすでによく知られているものもあるが、一方で先の漆器のように全く琉球のものと気づかれずに「残っている」ものもある。それらは琉球人の活動や、琉球と鹿児島の交流に関する極めてリアルで貴重な情報を発信してくれる資料（史料）である。近世琉球の国際関係史を主に研究する私は、2005年頃——つまり漆器「発見」事件の前後——から薩琉交流の諸相に関心を持つようになり、毎年他の研究者と協力し



図1 参考地図